

新聞・テレビが全く報道しなくなった
拉致問題・最新情報

緊急提言 被害者家族を孤立無援に
してはならない 櫻井よしこ



「日米同盟」が揺れている

- キャンセル寸前だった「オバマ来日」
- 鳩山「東アジア共同体構想」へ不審の目
- 上海万博「アメリカ館」で中国の陰謀
- オバマ・胡錦濤に「ハト」が「カモ」にされる!



SAPIO

国際情報誌
サピオ
INTERNATIONAL
INTELLIGENCE
MAGAZINE

怒りのキャンペーン第3弾 上杉隆
「記者クラブ」が国民の知る権利を奪っている

精神分析! 日本人を

SIMULATION REPORT

メラニョリー親和型うつ病
年間3万2249人! 「自殺」は日本の風土病だ

消費者心理学
金があっても「690円ジーンズ」デフレ・ブラックホールの恐怖

統合失調症
マニフェストを死守する鳩山政権の「精神危機」

平成版空気の研究
なぜ日本人は「自己啓発」「心身改造」に躍起になるのか

「沈黙の螺旋」モデル
やっぱり新聞・テレビを過信する日本人の「中流意識」

パラファイリア
性嗜好異常 急増する女性殺人犯と屈折する男性性犯罪

小学館
2009
12/16
特別
定価 **¥520**



エネルギー先進国フランスが切り開く 「原発、エコ、ルネサンス」

text／宮下洋一 Photo／Ryu Voelkel

ローヌ川沿いに建つクリュアス原子力発電所。現在、フランスでは59基の原発が稼働中である。

©JOSE FUSTE RAGA/SEBUN PHOTO/amanaimages

ドイツが、11年ぶりとなる中道右派政権誕生によってこれまで掲げていた「脱原発」の旗を降ろした。2021年までに原発を全面停止する脱原発法の制定などEUの中で最も「脱原発」色が強かったこの国が、運転延長の法改正で一致したのだ。ほかに、スウェーデンが30年ぶりに脱原発の方針を撤回。イギリス、イタリア、スイスも新規建設に動く。80年代「脱原発」が吹き荒れたEU諸国にいま、「原発ルネサンス（復興）」が起きている。なぜ、いまなのか。国内電力の約80%を原発でまかなう原発先進国フランスにその答えを探った。

「フランスの電気エネルギーの80%は、一体何から来ているのでしょうか。①石炭、②風力、③原子力」

ピンポン／小学生の男の子がいち早くテーブルの赤ボタンを両手で力強く叩いた。「エオリアン（風力）！」「ブー！」

隣のママにひと言告げられ、すぐさま言い直した。

「ニュクレール（原子力）！」「正解！」とクイズ進行者。

会場の特設スタジオから、拍手が沸き起こった。

パリで今年9月、今後のエネルギー資源と将来を見つめ直すシンポジウム「サロン・モッド・ダンプロア」が5日間、開かれた。一般市民には分かりにくいエネルギーの仕組み、風力・火力発電の歴史、再生利用可能な新エネルギーとしてこれからの将来に期待

がかかっている原子力発電などがブースを並べて紹介されていた。興味深いことに、ここでは科学者、物理学者、エンジニアたちの専門的な討論・講演会だけでなく、子供たちも楽しんで学ぶことができるゲーム感覚の催し物もたくさん用意されていたことだ。

週日には、パリの小中学生がこの会場を訪れ、授業の一環として原子力大国であるフランスの電力供給システムや、現在、注目を集めている風力発電なども学んでいるようだった。週末になると家族連れも多く、小さな子供に熱心に教え込むパパやママで溢れていた。

「ニュクレール！」で見事正解した8歳のオスカルクンは、クイズゲームの後、母親のクリステル・デュシェヌさんに手を引かれながら、原子力と

は何かを教えられていた。机に向かつて、不思議な形をする覚えてたの原子図を描きながら、オスカルクンは言った。「ニュクレールって何か分からないけど、ここでクイズをやったりできてすごく面白い」と笑顔で答えた。クリステルさん自身は「早い段階で簡単にでもいいので教えておきたい」と熱心な表情で語った。

一般公開されたこの手のシンポジウムに1日1000人を超える来場客が訪れるのはフランスならではの光景だ。年間に3〜4回の頻度で、原子力を中心としたエネルギーを見つめ直す催し物が、国や原子力企業だけでなく大学や民間団体が開催するのも、この国だからこそだと主催者たちは語った。

原子力エネルギーに対するフランス国民の関心は、このパリの会場だけではなかった。

「VISI'ATOME」――

南仏の都市、アビニョン近郊にある「原子力科学ミュージアム」。8〜18歳までの学生が、授業の一環として訪れることができる欧州唯一の原子力庁施設もそうだ。フランス全土から年間2万人の学生が集ま

り、原子力と核廃棄物処理を正確に教え込まれる。

館内ガイドを務めるカリリーヌ・カンペロさんは、この4年間で小中学生の考え方が変わってきていると説明した。「ミュージアムが2005年に開館された当時と比べ、こ

きているのです」

化石燃料は残り40年。原子力エネルギーは250年。

現在、世界には400基を超える原子力発電所がある。フランスは、米国に次ぐ最多59基を占め、国内電力の約80

ランスは長期保守政権のもとで、曲がりなりにも原子力エネルギーを堅持していく方向性を貫いた。

CO₂の排出量は、世界中で年間約290億トン。その中で、フランスは年間3億7000万トン排出。欧州連合

から、原子力発電がいかに影響しているかが分かる。

さらに、フランスは、そのドイツを始め、イタリア、スイス、ベルギー、イギリスなど周辺国に余剰電力を輸出（輸出額年間約4050億円）。周辺国がフランスの原子力エ



（上）シンポジウムで母親のクリステルさんと勉強するオスカルクン。（中・下）クイズやPCなどで楽しそうに原子力エネルギーを学ぶ子供たち。ちなみに2008年EU市民全体の世論調査で原子力「利用賛成」と答えたのは44%。前回（05年）と比べ7%上昇してい

こ2、3年で子供たちの反応に変化が起きています。以前は、石油と車社会に満足していた子供たちが、このところ、『石油が将来なくなれば、むしろ地球環境に良い』とか、『原子力のほうがクリーンだ』と意見を述べるようになって

%が原子力でまかなわれている。70年代から始まった石油ショックを発端に、資源不足に悩まされてきたこの国は、石炭・ガス・石油といったコスト高燃料の打開策を求めてきた。反原発の風潮が世に蔓延した80年代後半からも、フ

（EU）域内における国民1人当たりの年間平均排出量を見ると、8・2トンだが、主に原子力から電力供給しているフランスは、6・2トンと平均を大きく下回る。脱原発路線を敷いてきた隣国ドイツは、9・7トンという数字だ

エネルギーに頼っているという現状もある。『石炭・ガス・石油といった従来の化石燃料は、2040年から50年の間になくなると言われています。現在、世界では、500万トンのウランウムが発見されていて、専門

家の間では1500万トンが存在するとも言われています。となると、原子力エネルギーは、今後、2世紀半に渡って持続可能なクリーンエネルギーを提供できるのです」

こう語るのは「フランス原子力エネルギー協会（SFE N）」のフランシス・ソリン代表。フランスが原子力大国として、クリーンなエネルギーを世界に広めていくことが大切ではないかと問う。

たとえば、ドイツがこのまま脱原子力政策を継続していれば、CO₂排出量や石油、ガスの輸入は増加する一方になる。そこで代替電源として、風力や太陽光などの再生可能エネルギーの音が必然的に上がってくるのだが、供給安定性を欠くばかりか、発電コストがかかり過ぎてしまう。このまま反原子力政策を貫いていけば、2030年の予測では、石炭22%（現在40%）、原子力0%（同21%）、天然ガス22%（同15%）、再生可能エネルギー51%（同10%）という依存度が予測されていた。ドイツは、フランスを中心に国外原子力投資を積極化していくことが免れない状況に陥っていたのだ。

フランス人が原子力を再び見つめ直すようになってきたのは、クリーンで将来性があるという理解もあるが、そればかりではないというのが、フランス原子力庁（CEA）

です。かつて、フランスのドゴール政権は、これに危機感を抱きました。「フランスには資源がない。原子力こそ推進すべきだ」と。この他国に頼らないエネルギー政策のおかげ

で強調してみせた。「原子力に対する理解が、以前より正確になっていることでもあります。特に、核廃棄物に関する理解で、その資料を私たちに求める一般市民が

必ずしも原子力に反対していないこともきっかけです」
「エコジョーと結びつく原子力発電」

アセマ広報担当者が述べたように、ここ最近、

エコロジ界に新たな要因が加わってきている。原子力エコである。

フランスのCO₂排出量は、80年から90年までの10年間で、24%と激減しているが、それは同期間に原子力発電量が5倍に増えている事実が挙げられる。70年代には6基、80年代には43基が建設されていた。国民1人当たりのCO₂排出量も、前述したとおり、欧州先進国の中でも6・2トンと低い。



（上・左下）モダンアートの展覧会のようなVISIATOME「原子力科学ミュージアム」の館内。原子力についての正しい知識から放射性廃棄物の処理方法まで国民が知りたい情報が満載。（右下）ブルーノ・コンビ氏の超エコハウス地下室。ガスや石油に頼らないエコ冷暖房装置のシステムを説明。

のシルバン・グリニョン氏の考えた。

「地政学問題も大きく絡んでいます。ロシアのガス政策です。欧州の国々は、彼らのガスエネルギーに依存していま

で、現在、フランスの電気代はEUで最も安いほうにあります」

CEAのイサベル・アセマ広報担当者は、原子力が再活性化してきた理由を別の視点

年々、増加しています。それに、興味深いのは、アル・ゴア（元米副大統領）、リュック・ベッソン（仏映画監督）、ニコラ・ユロ（仏エコロジスト代表）などの環境主義者たちが、

07年に大統領選に出馬し、エコロジストで人気を集めたニコラ・ユロ氏も、原子力推進派として知られている。同氏が創設した「ニコラ・ユロ財団」の広報、マニユエラ・

ロラン氏も、「原子力をすべて肯定するわけではありませんが、今現在で、クリーンでコストが低いのは事実で、われわれはそれを認めざるを得ません」と言い切る。

エコロジストという一見、反原発というイメージが強いが、このように「原子力エ

コ」が日々、人気を集めている。「原子力推進エコロジスト (Ecologiste Pro-Nucléaire)」がそうである。その代表格であるフランス人のブルノ・コンビ氏は筆者は出会った。パリ郊外のウイユで、彼は、世界最高水準とされる省エネの「超エコハウス」を披露した。

60年代にオイルマンの父親から「火力と風力は絶対に十分な力にならない、原子力に将来がある」と説かれたコンビ氏は、こう考える。

「人類は今、幸福の絶頂を味わっている。今から50年後には燃料がなくなり、不幸のどん底に陥ります。そうならな

れこそがわれわれを救う唯一の手段です」

コンビ氏は、世界中に「原子力推進エコロジスト」の支持者を1万人持つ。彼のエコハウスは、壁から冷暖房装置、冷蔵庫から井戸水まで、すべてがローコスト、ローエネルギーのエコロジーに徹底され

似たようなエコハウスがありますが、原子力に頼らない国のため、CO₂排出量は、結果的にこの家の10倍になってしまっているのです」

世界に広がる「原子力ルネサンス」

2006年から、EUの委

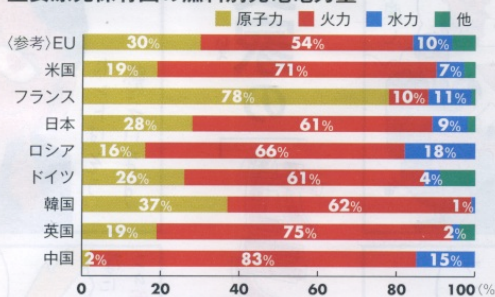
フランスのエネルギー使用によるCO₂排出量の推移

(百万トン) 出所: 国際エネルギー機関 (IEA) 資料等に基づき作成



フランスのCO₂排出量は80～90年で24%も減っているが、これは同時期に原子力発電量が5倍に増えたことが大きな要因。

主要原発保有国の燃料別発電電力量



世界各國の「原発ルネサンス」

※各種資料に基づき作成

ドイツ	11年ぶりに中道右派政権樹立で「脱原発」修正へ。
オランダ	現在1基保有。新設に向けた許可手続き開始。
スイス	05年法改正で新設凍結解除。
スウェーデン	09年2月、政府が脱原発政策を撤回。
イタリア	保有ゼロ国家が09年7月に原発再開法案を可決。
イギリス	今後20年間に1000万* ² ワットの建設計画。
アメリカ	建設、運転の一括許可制導入で建設規制を緩和。
中国	現在911* ² ワット (11基) を2020年に4000* ² ワットに。
インド	現在412* ² ワット (17基) を2032年に6300* ² ワットに。
ベトナム	2020年ごろから4基運転開始を目指す。
その他、スロバキア、ブルガリア、タイ、インドネシア、アラブ首長国連邦、エジプト、イスラエルなどでも導入計画。	

原子力推進の動きが加速し、新規発電所が次々と計画・建設され始めた。前述の「脱原発」路線を転換したドイツやスウェーデンだけではない。今年7月、イタリアが保有ゼロから4基建設にかじを切り、英国は大規模増設を計画。スイス、スロバキア、ブルガリアも停止していた建設を再開している。

原子力専門家のベルトラ・バレ氏は、「23年経った今でも、原発事故の話ばかりで、原子力への取り組みが停滞してしまっただけ。軍事の原子力は必要ではないが、使い方次第で、地球を救うエネルギーであることは間違いない」と信じている。

英国科学者で発明家のジェームズ・ラブロック氏も確信する。「フランスの例にならない、原子力を私たちのエネルギー源の根幹とする日の到来が、遅きに失しないことを希望する。炭素燃料から生じる危険性を回避できる代替エネルギーは、安全性、実用性、経済性からみて、今のところ原子力以外にはない」と。今後、「原子力ルネサンス」は、欧州だけでなく、日本にも到来するに違いない。

「石炭・ガス供給がほぼゼロに近いですから、工夫次第で私のように、消費エネルギー30倍減、CO₂も2000～5000倍減らすことができます。それができるのは、フランスが原子力でまかなわれているからです。デンマークにも、

国会、議会、評議会は、原子力の有用性、設備と廃棄物管理の安全性における共通の法的措置の必要性に迫られた。EU首脳会議や閣僚会議においては、加盟国の原子力政策の足並みがなかなか揃わないことから、EU共通の原子力推進策は打ち出せないのでは

いえる。理事会エネルギー担当のアンドレ・ピエバルグ氏は「安全性に基づいた原子力発展は、ヨーロッパだけでなく、世界中の任務であり、現代と次世代の任務でもある」と、世界に託する思いを語った。

特にEUでは、昨年頃から、